



中村俊定文庫  
文庫 18  
291







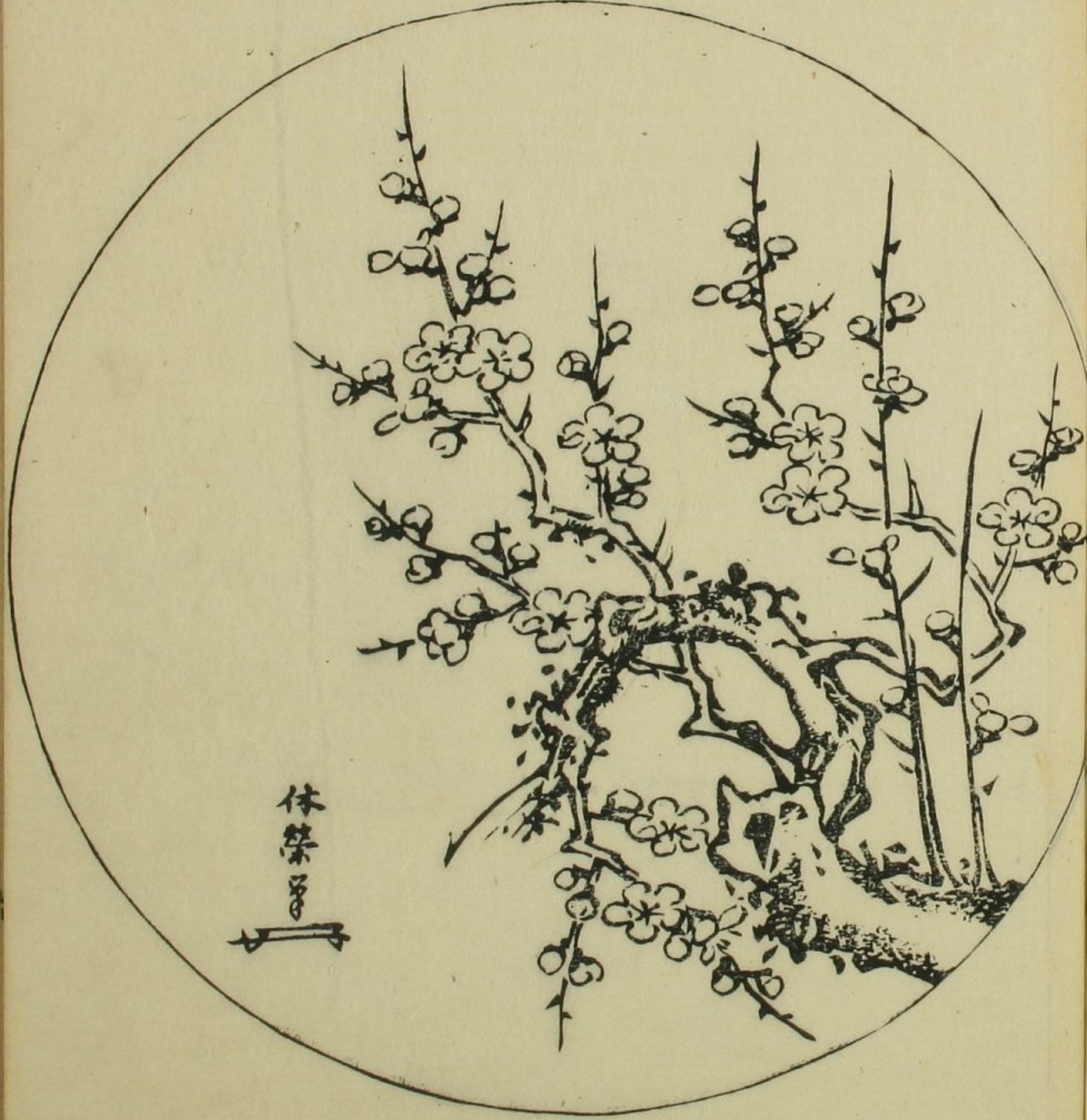
後抄のいふはるまゝの  
入るるまゝの

極音



延寶次韻の序の趣  
小冊の雪角に燈の  
杖とひまの





師の流をうけて  
み名園をのびて

去来

丁卯季秋下院





脇起

鹿の鳴き声の  
 遠くからきこえて  
 来る

お尋乃 鹿の鳴き声七人の旅の都

嵐雪

童子のささりの園のふりかへん

春来

舟の月夜乃 酒の杯をさして

梅郊

鹿の鳴き声の音もかき

あふとて 行よ 遠く 伏見の家 来

さうらう せん 遠く 鹿の鳴き



正月乃ちあけつりてあはれ日色  
片をよきとてんて梅の割れ  
様多村にやあやうきたのむじ  
愚僧といふもわらわのなる  
鳥よりけいこきこきとて  
いやく口へぬ房袖もこむ  
吉々のねるよんしとて  
孫うらみみるお秋の感  
郊 郊 郊 郊 郊 郊 郊

みと焼くまの月乃ちけ  
翌の曉とていふとて  
首川わたのち布乃持さ  
豊のこゝに清る年号  
けの程き地りるし  
祇園乃ちころ水は流  
梅と人となに王も作ら  
外てあせらるる  
郊 郊 郊 郊 郊 郊 郊







脇 正 獨吟

梅つもむし一輪がくろあしころこ

嵐雪

早のつゆの梅はくくるは 春末

いふ斗まき松のよみあしん

尋くもほほき朋友の君

福乃月あしこのすめる風れ底

首いよこしては梅のつれ







指くくは右ふ少翁の月居して  
龜をたすり乃こまきしれもまぬ  
何者か湖塘といひあし  
いくさの給るい回舎竹ふ  
かある程着流の盤乃うももた  
後之轆や人此かのみあ  
大さちるる密落る楠乃椽  
府の葉をほ葉にき舞

葉合の玉儀の騰乃こく斗  
高根の馬つぬまきし  
同く外に射むけの神あかん  
葉を後まきしつこま  
葉一もくさくさぬの花お場  
たのう日もの艶つこく艶



脇起 獨吟

其角

うげ出乃貝にりし世に新酒哉

新テす秋と雪乃焚もの 春朱

待月也帆柱抱つるのわらわん

笑し〜う捨犬のほろ

傘持の腕に袖を運る朝屋もみ

朽き齒より志と心焚く里に



右は眼さく火なほひく  
親乃倒すしちかす  
どよと川飲るも  
けのみささるる  
すいきん乃蛇の何の物な  
花ささるるや樹は  
首乃葉より尻をひる  
かすも千よふか

腰りまは母乃  
あらのあさるし  
き見んも背う  
翹うとれし  
松原のまは  
甘乃四討さ  
ある夜中  
腹の味



いみじくも奈良の伏見よ小半日  
乞食がうきな銭金の上  
藤房の中納言さういふ  
祢直、朝寝に神の羊部  
ゆめさしとらふと根乃立別  
とれとさうきん笛寒さ月  
主醬油我卵乃弄ししげらも  
又ひさききらひらから雨

算用乃指我らゆすぬ旅筆代  
ねらふにさうす柄杓の對  
羽見薬もやある床より  
高廉さしと切声くしよ  
余美ひも陶り惜ん  
ふのくしに梅首鶏のたまる池



子船の記畧

夏より南大橋をへし上こもつち山  
のふもと今戸の橋より舟入の  
つ驛わら子方里乃思ひをめぐ  
る前よりととて廻らつちのあ  
いさみある色と航しあゆむ敷  
十艘の舟をこもつちの舟  
船乃を舟をこもつちの舟



いさくとも海よ似くら船に  
子火煙もあしほらあかえ  
あしほらあかえ  
いさくとも海よ似くら船に  
船中乃破ねりる格のま  
あしほらあかえ

脇起 獨吟

向毎以水邊形  
容江東江西

其角

川上ハ柳むむの百千とら  
こ花の月よち乃傘  
亭の序月を殿に中此綱を  
いづく乃鐘とものうま  
仲約の死とあしほらあかえ  
あしほらあかえ



初ゆり木の方の阿武くさじに  
暮ぬよとほむる余全のふ親  
けき南越くくくくく  
物野市わしよきあきあき  
岸乃福おき寺さくくく  
園を踏りくく紅のりくく  
流きあきし日きしはくは山  
あめあきくくく川口乃埃

たつむのくく吐くゆ松子浪く  
世をりくくくくく  
約溜りくくわらこくくく  
はくくくくくくく  
あきあきくく物きもくく  
色はくくくくく  
多田院わききくくく  
くくくくくくく



かき風はかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかき

春

かきかきかきかきかきかき  
梅却子

秋

かきかきかきかきかきかき  
菊同



春

雪の三千坪の白の隅花子

秋

名月をくさの宿る盆の徒桃紅子

くさ

多御の落る下り菊の落 夏菴

雨の海に流るる石 芥石

着る小尾のまわりの花 沾戸

木の葉をくさの宿る小枝那 陶巾  
上へ下へと思の里まわりの梅花 雲里

あま

朝白の藤ねる垣のちりり 沾雨

こゆるふねをささるる花 阿郎

くさの稲をよる風のもち 渡江

初月をくさの宿る小枝 五来

くさの杖をよる小の音 了因







後序

一 抄本燃紙のことに然る時々の  
素より左遊を福とあり申す  
嵐をさる角也か入者、阿難が業  
子比へ三人とあり矣、尚とや申す







梅部子

二魚川

十有



